

「保守」を考える

伊藤 三平

はじめに

自民党から民主党に政権が変わり、その民主党にもこのまま任せて良いのかとの不信感は強まっている。それぞれの政党が有権者に媚びた政策を出してくる。だけど実行はされないし、実行した場合には負の側面も見えてくる。

考えてみれば当たり前のことなのだ。実行可能で、全てに良い政策があるのならば、すでに実施されているはずである。

国民の側にも、「自分はこの政策を求めるが、その代わり、こちらは我慢する」というスタンス（自分なりの考え方の軸）が必要と思う。

私は、全共闘華やかなりし頃より「おまえは右だ」と言われ続けていたが、最近右も何か行き過ぎるような気がする。そこで自分なりに「保守」の意味、スタンスを整理してみた。あくまでも私なりの「保守」であり、普遍的かは自信がない。

1. 「保守」の本当の意味

「保守」は「革新」に対比される。加えて「保守反動」と結びつきやすく、イメージは悪い。既得権益に結びついて利権をむさぼり、正義、自由、民主を求めて変革しようとする人を圧迫するようなイメージまでである。

悪いイメージも仕方のない面もある。日本における保守政党＝自民党の繰り返されてきた腐敗や、「真の保守主義」などと言いながら、目につくことは靖国神社に参拝することを主張するぐらいでは「保守」のイメージは良くならない。

「保守」を『広辞苑（第五版）』でひくと「旧来の風習・伝統を重んじ、それを保存しようとすること」で対語は「革新」（旧来の組織・制度・慣習・方法などを変えて新しくすること）とある。「保守的」は「新しいものをきらい、旧態を守ろうとするさま」とまで書いてある。左寄りとも言われている『広辞苑（第五版）』及び岩波書店の意識が出ているような語釈である。

政治における「保守」はこの意味とは違うのだ。『広辞苑』にも続けて「保守党」の解説があり「①保守主義を奉ずる党派、②（Conservative Party）労働党と並ぶイギリス二大政党の一。トーリー党の後身で、現在は産業資本の利益を代表。」とある。

このC o n s e r v a t i v e (コンサバティブ) に本来の「保守」の価値観が入っている。今度は英和辞典だ。C o n s e r v a t i v eには「無理のない」とか「安全サイド」という意味も含まれている。私は職業柄、事業計画の立案のお手伝いをすることがある。

この時、その事業計画が現実離れした強気な計画だと、「もっとコンサバティブな計画にしろ」と言うことがある。言い換えると「現実的な無理のない計画にしろ」「より事業遂行に対して安全な計画にしろ」と言うことである。

「保守」について語られている「旧来の風習・伝統を重んじ、それを保存しようとする」ともこの通りであるが、京都生まれの私が真意を解説する。

「伝統」とは「残すに値することを見極めて残し、それを守っていく」ことなのだ。あなたも京都が伝統を大事にして守っている都市と認めるだろう。その京都において、中選挙区の時代には共産党が議席を持っていたことを思い出して欲しい。要は長年にわたって、この味がいいと洗練されてきたものを守る。このような生地仕立てがいいという織り、染色の技術を守る。作法も長年にわたりこのように動作すればスムーズに所作ができて、相手にも不快をあたえないということで伝統になっているのだ。どこに変える必要がありますか。これが「伝統」。変えなければいけない不都合なものは「旧習」。

例えば椅子の生活が多くなるとかの時代の変化には、それぞれの分野で対応(革新)しているのだ。

2. 「保守」の具体的な価値観

要は「保守的な生き方」とは「人生を生きていく上で現実的で安心な間違いのない生き方」ということだ。具体的な生き方に落とし込むと「質素、儉約、勤勉、真面目を基本として自分の生活は自分で守る自助努力を続ける生き方」になる。これが出来れば、生きていく上で間違いを犯さない生き方となることはあなたにも異論はないであろう。

私もそうだが「勤勉・真面目に働く」人にとっては、「世の中が悪い」とか「鬱病だ」とか「身体の具合が悪い」とかの理由をつけても働かない者には厳しくなる。最近では、会社に行くと具合が悪くなるのも、なんとか鬱病として病気になっている。私に言わせれば「怠けもの」だ。このように「保守」は基本的には「弱者救済」には冷淡となる。「弱者救済」の立場＝「かわいそうな人に温かい手を」が、世にいうところの革新政党のテーゼとなる。本来の革新政党も不真面目な弱者まで救済することは考えていないのだが、弱者になった理由ま

で詮索するのは難しく、結局、弱者を救済しようとする税金を高くして面倒を見なくてはいけなくなる。だから「保守＝勤勉・真面目の価値観重視」は税金を高くする「大きな政府」には反対となる。

「勤勉、真面目」に働くわけだから、その働きの成果をそのまま受取りたいのが「保守」の思想となる。自助努力をして「自分の生活は自分で守る」から、政府は余計なことをせず、小さな政府にして、税金を少なくして欲しいと言うことになる。このような世界では、人より「勤勉・真面目」に働く人と、働かない人の格差が広がることは当然となる。不正なことまでして格差が広がるのは許さないが、働きの結果としてであれば、「優勝劣敗＝弱肉強食」の世の中もやむを得ないと考える。

また働きの成果を受けたいわけだから、自分たちの働きの道が広がるように、規制も緩和して欲しいとなる。年金制度など無ければ無いでもいい。自助努力で老後のことまで考えればいいだけだ。

今の政党は、どうしても人気取りに走る。だから「いいとこ取り」（クリームスキミング）の政策を乱発する。上記のことも、人気取り政党にかかると「税金は安くします、増税しません」「規制は緩和します」「困った人には手を差し伸べます」「年金、健康保険も含めた福祉も充実します」となる。前の2つが「保守」の立場（ここで自分の業界の不利益となる規制緩和は反対という者を保守反動と言う）、後ろの2つが弱者救済が「革新＝民主」の立場となる。だから国民自身もよくわからなくなって右往左往の浮動票と化す。

アメリカで近年生じているティ・パーティという運動は、建国時のボストン茶会事件における増税反対の精神で、オバマ大統領の医療保険改革（弱者救済）制度などの大きな政府につながる政策に反対しているわけだ。アメリカだと「自分の生活は自分で守る」結果として銃規制にも当然、反対となり、こういうのはどうかとも思うが。

保守における「質素、儉約、勤勉、真面目にして自助努力」という価値観を強調してきたが、これだけに脚光が当たるとストイックな人が保守ではないかと思われるかもしれない。違うのだ。むしろ人間の欲は全て肯定するのが保守だ。

「質素、儉約、勤勉、真面目」に働いて大きく財産を増やしたいのだ。財産を殖やした結果、奢りが出て、贅沢によって没落する人間も出るが、それは「奢れる者は久しからず」を教訓として、「財産はできた。でも基本は質素、儉約、勤勉、真面目だよな」と思う人が「保守層」なのだ。

「人間の欲を全て肯定し、小さな創意工夫を大事に」「税金を安く、政府の関

与はできるだけ少なく、規制は緩和」という価値観の延長に「自由」が生まれてくることは言うまでもない。政府に”おんぶにだっこ”、だけど自由にして欲しいというのは虫が良すぎるのだ。

同時に自分の意見を反映したいという「民主主義」が生まれる。「責任を伴う民主主義」だ。「要求を出す民主主義」と違うことを肝に銘じてほしい。

3. 保守の原点「自営農民」「地侍」層

この生き方を体現した階層が日本では鎌倉御家人、それ以降室町時代後期までの国人領主、地侍、江戸期以降の自営農民・自営商工業者などだ。武士のようだが、徳川時代になってからの藩に仕える武士のイメージではない。江戸期の藩士は、今の官僚と同じである。これではないのだ。

「一生懸命」とも書かれる「一所懸命」の鎌倉武士の精神、すなわち自分の一族が開墾し、耕地にした土地を命を懸けて守る気合いで所領を増やし、守ってきた精神こそが、保守の精神に近い。土地に密接に絡んだ精神である。

イギリスの保守党を支えてきた貴族、ジェントリー（ジェントルマンの語源）も田園に所領があるのが基本である。ドイツのユンカー（プロイセンの地主貴族）もそうだろう。歴史の浅いアメリカにおいて『風とともに去りぬ』のヒロイン、スカーレット・オハラも困難から立ち直ろうと決意する時、南部の自家の農園がある地タラに出向くのだ。こう考えると土地＝自然に根付いている人間の方が健全なのかもしれないという気がしている。根無し草は弱いのだ。

国人領主、地侍、自営大規模農民は自ら「質素、儉約、勤勉、真面目を体現して自助努力で開墾」してきたと同時に、家の子郎党、小作人をたばねる経営者でもある。欲深く搾取することもあるが、長い目でみれば家の子郎党、小作人を大事にしないと開墾も進まず、生産性が上がらないことは知っていたのだ。今では中小企業のオーナーだ。

国人領主、地侍、自営大規模農民は自分の土地の生産性を上げるために、ちょっとした工夫を常にしていたわけだ。工夫が収穫を増やし、自分の取り分を多くするからだ。質素、儉約、勤勉、真面目の価値観に加えて、欲というエンジンによる「ちょっとした創意工夫の精神」が脈々と流れてきたから、今の日本があるわけだ。

このような国人領主、地侍、自営大規模農民は、私欲を追求して、その結果、戦争ばかりしていたのではないかと思う人がいるかもしれないが、考えて欲しい。確かに自分の土地を守るために武装し、戦うこともあるが、兵は自分の親

族、一族郎党である。小作人と言えども長年にわたり、自分の家の為に働いてくれた人間である。言い換えると財産の一つである。ムザムザ死なせてなるかの気持ちが常に働いていたのである。

兵を大量に殺すのは国民国家になってからである。「一銭五厘の赤紙」による徴兵で集めた兵だから殺すのに何も感じない。

封建時代は、自分の一族郎党をムザムザ死なせないように、家の存続を考え、「誰が自分の所領を守ってくれるのか」の外交に鋭敏な神経を働かせていたのだ。婚姻も大事だった。戦いの中で裏切ればこの時点では所領も守れるかもしれないが、裏切り者は周りから信頼されない。信頼されなければ長い目で見た場合、家の存続は難しい。小早川家の裏切りで関ヶ原は決着がついたが、後に小早川家を取りつぶしにあった時、小早川浪人は仕官の道がなかったという。周囲の情勢を見ながら自家の保全を考えても結論が出ない時は、親子、兄弟を敵味方に分けて、それぞれが属した陣営で真剣に戦うことで家の存続をはかったのだ。(いい加減に戦うと疑心を持たれて、勝つてもつぶされる)

この「保守」の精神で真剣な外交を展開して欲しい。日本の周りの大国はアメリカ、ロシア、中国だ。同盟を結ぶとは、いざとなればその国に属して、その国の為に一緒に戦うという覚悟がある。では上記三国の中で、いざという時にどこに属せばいいかと考えるとアメリカ人になるのがマシではなからうか。

中国は、あの北朝鮮を支持している国なのだ。中国における今のチベットのようになってもいいのかだ。共産主義を信奉している国だ。共産主義は、全体主義と同様に自由を圧殺し、人を信じられないくらい平気で殺している。

毛沢東のことを書いた『マオ』を読むと、毛沢東は7000万人を殺している。別の資料だが、大躍進政策の失敗で3年間で2000万~4000万人が死に、文化大革命で300万人が投獄され50万人が処刑されたとも言われている。その毛沢東を今の中国はまだ讃えている。

一方、今のロシアはスターリンは讃えてはいないだろうが、彼は党での批判で800万人を処刑。富農絶滅政策で900万人近い農民が追われ、その半分が殺されたとかの話もある。少数民族になるといちいちあげられないほど虐殺している。ともかく戦争終了後に泥棒猫みたいに北方領土に侵攻した国を信頼できるかだ。

私も含め、保守層はアメリカだって全面的には信じていない。ベトナムで失敗したのに何で懲りないのかと思えるほどの愚かと思える外交を繰り返しているが、この3国の中では、「まあ、ましかな」ということだ。外交も現実的な安全サイドでいくしかないのだ。

アメリカは、沖縄の基地に拘るから嫌だとなると自主独立をすると覚悟を決める必要がある。核武装をし、軍事予算を増額し、徴兵制を復活するようなことまでしないとイケない。

「こちらが何もしなければ相手も何もしないだろう」なんて言う幻想を「保守」は持たない。今のチベットのようになるだけだ。占領され、内では抑圧されていても、外に対しては我々は日本国民の文化を破壊はしていない、尊重しているとかの宣伝を世界に流されるだけだ。

4. 保守は自国を無条件に賛美するものなのだろうか

今度は行き過ぎた「右」の思想にも反論しておきたい。日本の特に現代史において、日本が中国、韓国、北朝鮮、東南アジア、オセアニアに対して侵略したことや悪いことを認めると自虐史観とか言って嫌悪する人がいる。

私が言うところの「保守」層は、安全サイドの考え方＝現実に立脚して考えるわけであり、事実を認めるのに抵抗はない。南京事件として虐殺があったという事実は覆せないと思う。虐殺の人数については「ちょっと待てよ」と言いたいところはあるが。

韓国、北朝鮮に対して、かの国の文化を壊すようなこと（創氏改姓など）を実質強要したことも認める。中国に侵略したことも認めざるを得ない（東亜解放と言っても具体論はないようだし、現地から要請があったと言っても傀儡政権ならば通らないであろう）。

靖国神社参拝の件も難しい問題だが、戦死した若者の遺書の多くに「靖国で会おう」と書いてあるのを見ると、これらの英霊の御供養は靖国神社となろう。A級戦犯合祀の靖国とは別の祭祀場所で御供養というのは英霊に失礼であろう。では英霊は、当時の軍。政府首脳にどのような気持ちを持っているだろうか。私だったら責任を取ってくれと言う。国民国家の義務として兵役は仕方ないとしても、満足に食糧補給もなく、劣る兵器で、しかも杜撰な戦略、これは何だったのかと思っておられるのではなかろうか。

今のA級戦犯が本当に全員、戦犯かについては議論もあるが、代表して責任を取ってくれたと思うしかないのではないか。ここを否定したら、日本人としてもう一度、あの戦争の責任（当時の指導者に責任がないとは誰も言わないだろう）を追求しないと、英霊に申し訳が立たないと思う。でも、それを現在に実施するのは不毛の作業だろう。

中国は「日本人民も当時の軍国主義者の被害者である」として友好を結んできた。当時の軍国主義者＝A級戦犯と比定するのも一理ある。

昭和天皇も合祀されたことに非常な不快を示され、以降靖国神社に参拝されな

い。これも英霊には失礼だと思うのだが。
一番良いのは合祀をやめることだ。靖国神社だけの裁量で何とかならないかと思うが、私ごときの考えが及ばない課題があるのだろうか。

外交は自国の安全を守るものである。認めるべき点は認め、謝罪すべきは謝罪すれば、主張することもできると思う。闇雲に日本に問題はない、謝罪する必要がないという態度は「安全サイド」の生き方ではない。隣人の言い分にも耳を傾ける必要がある。友人なら付き合いなくても済むが、接する国と国が付き合い合わないわけにいかない。次代に大きなツケをまわすことは避けなくてはいけない。(あなたも経験されていよう。口ででかいことを言っていた人間がいざとなると腰砕けになることを。対中国強硬派もそのたぐいだ)

前述したが保守が大事にする「伝統」は「守るに値することを次代に伝えていくこと」である。賛美に値しないことまで大事にする必要はないのだ。

おわりに

自分なりに整理しようと思ったら、こんなに長くなった。まだ整理されていないのかもしれない。「保守」＝「安全サイドの考え方、現実的で間違いのない生き方」＝「人間としての欲は全て肯定するが、質素、儉約、勤勉、真面目を基本を忘れず、自分の生活は自分で守る」ことの大切さを認識していただければ幸いである。

企業の就職試験においても、学生が「質素、儉約、勤勉、真面目」の価値観を有しているかを第一に選考すればいいのだと思う。具体的には小中高時代に皆勤賞だったなどでいいのである。娘は中高一貫校だったが、小学校もある。高校の卒業式の時に、なんと小学校から12年間皆勤の生徒が母親と一緒に表彰された。参列者全員が盛大な拍手。本人も偉いし、母親も立派である。昔ならば「こういう娘を嫁にもらえば間違いがない」である。

「保守」は反面として、どうしても弱者には厳しくなります。その補完は常に意識しておくことは必要だと思います。